

1. 活動報告（事務局 記）

—10月29日（木）非定常作業を行いました。

- 1) 駐車場入り口の柵を購入部品で修復しました。伊原・吉富・原田マ
- 2) ハゼかけで使用した冠竹・足竹をトタンカバーし保管しました。吉富
- 3) 湿地帯のエコアップと次回の修復作業検討しました。前田

—11月1日（日）午前10時まで、田圃中央に置かれた3トンの厩肥を、全体に散布しました。休憩ののち、維持活動として遊歩道および水路の修復作業をおこないました。遊歩道については、池の横断木橋の補強、湿地帯の木橋の一部撤去およびU字溝の設置をおこないました。水路については、最下流部（川への放流部）の塩ビ管を交換しました。会員12名が参加しました。参加された会員の皆様、お疲れ様でした。

—11月28日（土）親子自然観察隊「里山の暮らし」

稲穂を千歯抜き（せんばこき、千把抜きとも書く）や、回転式脱穀機で脱穀し、唐箕（とうみ）で選別して良い粳のみを取り出しました。藁は束ねて、木の棒の杓（おうご）で背負ってもらいました。子供たちに石臼でモチ米を挽いてもらい、粉をダンゴにし、茹でて、きな粉をつけてきな粉餅にして食べました。あと、差し入れのお芋を焼いて食べました。

藁から縄を作ってもらうために、選んでもらい、木槌で叩いて柔らかくし、藁を繕って縄にしてもらいました。

（藁を選ぶ（すぐる）とは、多くの中からしごいてすぐれたものを選び出すこと）

参加者は、子供6人、親5人、山大学生2人、会員15人でした。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎見学者

◎行 事

- 12月11日（金）収穫祭準備（洗米・会場づくり）
- 12月12日（土）収穫祭（餅つき）27年度親子観察隊解隊式
- 12月26日（土）維持活動・年末懇親会

3. 来訪者の声

今月はありません。

4. 会員の声ー1【柿の文化】（内藤 武顕 記）

柿がいかにも日本の晩秋の風情をかもしだす。果実がスーパーの陳列を彩る季節となりました。何気なく商品棚を見渡すと価格表のついた西条柿や富有柿が色艶やかに顔を並べている。

先日、ビオトープの散策の帰路、近所の男性に道端の次郎柿を枝ごと折ってもらった。田舎の匂いと自然色の柿であった。ふと柿のルーツを探りたくなった。原産地は中国揚子江の流域でその記録は紀元前2世紀までさかのぼる。日本には奈良時代に渡来している。

柿は王朝の人たちの風雅の対象から次第に食生活へと溶け込んでくる。当時の柿は殆んど渋柿だったらしく酒樽に入れたり、米びつに入れたりして渋抜きにずいぶんと工夫をこらした様子、又串柿、ころ柿、吊るし柿等もその知恵の名残のようです。

「柿が赤くなれば医者が青くなる」と云う言い伝えがあった。昔々、お坊さんは旅をする時、いつも持って歩くものがあつたらしい。何でしょう？それは干し柿でした。行き倒れの旅人に食べさせるためだったようです。薬用効果もあつたようですね。昔、私は三炭町を梯子酒する時は酔い醒めに柿をよく食べました。二日酔いにはならなかった。

鎌倉時代に入り、ようやく甘柿（きざわし、きざ柿、木練柿等）が現れてきます。柿なます、柿羊かん、寒天等が食用として登場するようになり柿が脚光を浴びて来る。そして柿が盛んに植えられるようになる。日本の秋の田園風景として最も親しい果物となっていた。

今は21世紀、庭に柿の木のある家も減り、柿も放置されている風景が目につくようになった。収穫に感謝して枝に一つ残す「木守り柿」の風習などもすっかり忘れかけている。

ところが、先日の俳句教室で「一番の柿を烏（カラス）に喰われけり」と詠んだ人が現れ、少し救われた気持ちになった。

柿文化の結びとして俳句を引用してみました。

里古りて 柿の木もたぬ 家もなし（芭蕉）

よろよると 棹がのぼりて 柿挟む（虚子） 小学生のころ本家の柿を竹棹で無断で片っぱしからもいで、よく叱られた。

極めつけ・・・・・・・・柿喰へば 鐘が鳴るなり 法隆寺（子規）

◎会員の声ー2【11月のカブトムシ幼虫：ビオトープの田んぼ】（管 哲郎 記）

11月1日、エコアップ作業日に当たり10時までは稲刈り後の水田に堆肥散布を行いました。堆肥は馬糞堆肥でしたが、一輪車への積み込み作業中で掘りくずした堆肥の中より、大きく育った“カブトムシの幼虫”が10頭ほど出てきました。

数が多いので通常の昆虫の飼育箱では小さすぎるため、衣装ケースを利用し即席の飼育箱を完成させました。蛹になるまでの幼虫のエサとして、堆肥の一部に加え大急ぎでホームセンターより仕入れてきた「カブト・クワガタの飼育マット」、それにシイタケ栽培地に入りシイタケのホダ木（クヌギ・ナラ）の枯れた木くずを混ぜ、何とか幼虫を収めておきました。幸いにもまだ幼虫であり、多少動かしたりしても大丈夫であるはず、サナギになった後、手でさわったりするとその部分に変形して、不完全な成虫になるので要注意です。来年の発生が楽しみになりました。



馬糞堆肥の散布作業



大きく育ったカブトムシの幼虫



衣装箱で作った飼育箱

※ 今から先はイノシシが匂いを嗅いで幼虫を食べにくる恐れがあり、防護柵を全周実施しました。また珍しがって開けてみたり、生育を見るため触らない様注意管理します。

5. 親子自然観察隊 「里山の暮らし」(管 哲郎 記)

11月28日、最後の土曜日でしたが、暖かな初冬も終わり、例年通りの寒い日に戻ったようで、今日は防寒コートが離せませんでした。しかし、これくらいの寒さでは子供たちにほとんど影響はなく、それぞれの役割と行事を滞りなく進めることができました。

本日の作業はイネコギ(人力、足踏機)と、モチ米を石うすでひきキナコもちをつくることと、そのあと稲わらで「縄づくり」を体験しました。

「縄づくり」も順序があり、稲穂を取り除いた後に「ワラを選(すぐ)る」作業を行います。そのあと選りすぐった藁を軽く槌でたたきほぐし、それから縄をヨリ始めます。縄づくりは思った以上に難しかったようで、稲わらをヨル作業に親も子も苦労したようです。それでも何とか出来上がり、輪飾りの形に仕上げたりして持ち帰りました。また会員から「イモ」の差し入れがあり、さっそく炭火で焼き芋にし、キナコもちと一緒にいただきました。屋外で食べるイモやきなこモチの味はまた格別です、お芋も結構な量をいただいたのですが、キナコもちとともに完食！残りはありませんでした。



千葉扱きで脱穀



唐箕で選別



木の棒の枅（おうご）で藁を背負う



藁を搓って縄を編む

親子自然観察隊の親子の感想

★月本直秀

初めてみる道具でびっくりしました。稲こぎやとうみは、ちょっと難しかったけど、楽しかったです。もち米を粉にして作ったおだんごは、おいしかったのでたくさん食べました。しめ縄作りは、最初わからなかったけどおじちゃんに教えてもらって上手に出来たのでうれしかったです。

★月本（母）

稲こぎ体験、しめ縄作りと貴重な体験をさせて頂きました。ありがとうございました。

★下川航平

石臼を回す時に腕の筋トレになった。縄を作るのに苦労しました。

★下川拓実

せんばこぎが楽しかったです。焼き芋がとてもおいしかったです。

★永富 花音

『千歯扱き』は初めは仲々うまく出来ませんでした。『足踏み脱穀機』は足踏みをしてもらったので簡単に出来ました。昔の人は大変だったんだなと思いました。

★永富 利津子（母）

江戸～昭和中頃の脱穀機が動いているのを初めて見ました。出来たら現代の脱穀機も見なかったです。速度や労力の違いも体験出来たらいいなと思いました。

6. ピオトーブ関連：「山口県のトンボたち」 （管 哲郎 記）

(35) オナガアカネ *Sympetrum cordulegaster*

トンボ科 Libellulidae

毎年秋になると大陸より飛来してくる種です、主に日本海側に多く飛来するようです。以前はわざわざ島根県の海岸まで採集に行っていたようですが、筆者は下関や長門の海岸で発見しました。しかし飛来してくる数は少なく、特に♂はなかなか見つかりません。

9月～11月に見られます。北海道より沖縄まで見られるようですが、海岸沿いでみられるようです。オスはやはり池の周辺部で、メスは海岸沿いの草地に多いようです。

比較的小型のトンボですが飛翔力はすごいものがあり、網で捕まえそこなうとあっという間にはるか彼方へ飛んで行ってしまいます。日本産のアカトンボは捕まえそこなっても近くに再び舞い戻ったりしますが、このトンボは一度逃すと再捕獲でにくいと思われまので要注意です。♂の特徴として顔の「鼻」の部分が白く割と簡単に確認できますが、数が少ないのが難点です。

「日本トンボ学会」の「オナガアカネ部会」の担当者より毎年筆者宛てに山口県への飛来状況を問い合わせてきますが、目撃ゼロも珍しくありません、海岸近くの浜辺や池などを広範囲に探す作業は大変です。

写真の♂トンボは長門市の海岸近くの池の周りで、♀トンボは下関市豊浦町の海岸の草地で発見しました。♀トンボの見つかる数は1日に1～2頭ほどと比較的多いのですが、♂トンボはめったに見つかりませんので、♂トンボの生態写真としては筆者はこの写真1枚しか持っていません、♂トンボの生態写真は今後の目標です。



オナガアカネ ♂



オナガアカネ ♀

7. 会よりの連絡事項

1. 収穫祭については昨年同様、久保田宇部市長・JA山口宇部組合長をお招きし、稲作体験に沢山の参加者に参加を呼び掛けています。そのほか農業を含む産業実習で二侯瀬に在住の東南アジア（ベトナム・マレーシア・インドネシア）の方々の10名程度の参加希望者も有り連絡を受けています。
2. 収穫祭もさることながら、その準備にご苦労をおかけします。したがって急遽「収穫祭餅つき実行委員」を選出し特に前準備にご協力を頂きたくおねがいします。委員には会長・副会長はもちろん事務局4名と二侯瀬地区の会員は委員となりますので万障繰り合わせてご協力をおねがいします。 その他金曜日にお勤めのない方も申し出ください。

8. 編集後記

今年4月から人事異動で新しい職場になりました。4人グループで行う仕事ですが、この職場4年目（最長年数）の方が4月2日から突然メンタルで病休に入ってしまった。私を含む2人は今年4月からこの職場で仕事も慣れておらず、もう一人は2年目で、皆子育て等で残業もなかなか難しい状態。代替要員も補充されないままでとても困っています。ここ数年メンタルで休業される方が多く、私のところでは、けっこうどの職場でもいらっしゃいます。ずっと以前、私も職場の人間関係等で悩んでいたことがあります。ちょうど「これは目からうろこ」だったのは、大学の名誉教授（だったと思います…）の先生のお話でした。それは、「池にブラックバスを放すと、そこに前から生息していた生き物は食べられたりして、生態系が乱れます。でもそのうち、小さな魚たちはブラックバスがいない深さのところに移動して、むやみに食べられないようになります。」というお話です。これを職場に置き換えると、「自分とは合わない人がいて困るけれども、その人にも実は言い分あり、でも私にも言い分ありだから、相手が自分の思いに沿わなくてもそれに固執せず、またその人の全部を非難せず、仕事上で折衝しなければならないときはそこについてはうまく仕事が進むように折り合って、あとはそれなりに距離を置いて、他に移動して楽しもう。」ということでしょうか。これで本来的に良いかどうか分かりませんが、当時悩んでいた私としてはかなりの救いの言葉でした。日々の生活で自然から学べることって実はいっぱいあるのではと思ったのもその時です。みんなが、いろいろなヒントを得て、気を楽しんで生きていければ良いのと思います。とはいっても、先日人事のお話で、「今4人のところを3人でまわせてるんだから、このまま定員を一人減にしてもいいんじゃない？」というお話が出ているそう。これもかなりのショックでへこたれそうです…。でもぼちぼち頑張ります！

（ 大野 靖子 記 ）